

賛美

はじめに・・・学びの目的

1. 祈りにおいて、次の3つのことを聖書から学びました。
 - (1) 私たちの祈りの対象は、父なる神です。
 - (2) 私たちは、主イエス・キリストの御名によって祈ります。イエスは、天において父なる神の右に座し、大祭司として私たちのために執り成してください。
 - (3) 祈りの助けは、私たちの内に住んでくださっている聖霊によります。私たちがどのように祈ってよいのか、わからないときでも、聖霊が助けてくださり、共に祈ってください。
2. では、賛美はどのようなのでしょうか。次の3つのポイントに注意して、聖書を学びます。
 - (1) 賛美の対象：賛美は神様をほめたたえることですが、祈りと同様に、賛美の対象は父なる神と言えるのでしょうか。それとも、イエス様や聖霊をも、ほめたたえてよいのでしょうか。
 - (2) 賛美の内容：賛美歌の中には、神をほめたたえる内容だけでなく、信仰者の証しや励ましなどもあります。そういう内容も、賛美といってよいのでしょうか。
 - (3) 賛美の方法：教会音楽は、伝統的には聖歌隊とオルガンという形式ですが、教会によっては、ギターやドラムを用いたり、踊ったりすることもあります。そのような賛美の方法は、礼拝にふさわしいのでしょうか。

アウトライン

1. イスラエル民族草創期における賛美（紀元前 1500 年頃）
 2. ダビデ王とソロモン王の時代における賛美（紀元前 1000 年頃）
 3. 賛美の本質 詩篇 33 : 1~3
 4. 賛美の内容
 5. 賛美と聖霊 エペソ 5 : 18~21
 6. 賛美と苦難 詩篇 63
-
1. イスラエル民族草創期における賛美（紀元前 1500 年頃）
 - (1) イスラエル十二部族のうち、メシアが出るのはユダ族から。ユダ=ほめたたえる
 - (2) 出エジプト記で、はじめて「歌」が登場する。奴隷状態から解放され、エジプト軍の追撃から救われた者たちが、その喜びとともに神をほめたたえた。
 - ① モーセとイスラエル人は、主に向かって、この歌を歌った・・・(出 15 : 1~18)
 - ② アロンの姉、女預言者ミリヤムはタンバリンを手に取り、女たちもみなタンバリンを持って、踊りながら彼女について出て来た・・・(出 15 : 20~21)
 - (3) モーセの幕屋には、楽器はなかった
 - ① 祭司が着る青服のすそに、金の鈴をつける。聖所に入り、主の前に出るとき、またそこを去るとき、その音が聞こえるようにする。彼が死なないためである。(出 28 : 31~35) → 出 39 : 25
 - ② 井戸の歌 (民 21 : 16~18)
 - ③ ことわざを唱える者たちの歌 (民 21 : 27~30)

- ④ まとめ：モーセの幕屋の器具の中に、音を発するものは金の鈴だけ。楽器は一切持ち込まれない。歌は、イスラエルの民に神がしてくださったみわざなどを教え覚えさせるための手段。
2. ユダ族のダビデ王とソロモン王の時代における賛美（紀元前1000年頃）
- (1) ダビデがエルサレムを都とした最初の年（ダビデ37歳）、ダビデは初めて、楽器と歌による奉仕者を立てて、主なる神をほめたたえた。
- ① 【ダビデの幕屋】神の箱のために場所を定め、そのために天幕を張った（I歴15：1）
- ② ダビデとイスラエルの全家はすべてのもみ材のもので、立琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを打ち鳴らして、主の前で、力の限り喜び踊った（IIサム6：5）
- ③ ダビデは、主の前で、力の限り踊った。ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた（IIサム6：14）・・・ごろつきが恥ずかしげもなく裸になるように（6：20）
- ④ ダビデはレビ人のつかさたちに、彼らの同族の者たちを、十弦の琴、立琴、シンバルなどの楽器を使う歌うたいとして立て、喜びの声をあげて歌わせるよう命じた。そこでレビ人は、ヨエルの子^{ヘマン}、ベレクヤの子^{アサフ}、クシャヤの子^{エタン}を立てた（I歴15：16～21）
- ⑤ 歌うたいは、ヘマン、アサフ、エタン。彼らは青銅のシンバルを用いて歌った。ゼカリヤ、アジエル、シェミタモテ、エヒエル、ウニ、エリアブ、ベナヤは、十弦の琴を用いてアラモテに合わせた。マティテヤ、エリフェレフ、ミクネヤ、オベデ・エドム、エイエル、アザズヤは、八弦の立琴に合わせて指揮した（I歴15：19～21）
- ⑥ ダビデは白亜麻布の衣を身にまとっていた。箱をかつぐすべてのレビ人、歌うたいたち、荷物係長ケナヌヤ、歌うたいたちも、同様であった（I歴15：27）
- ⑦ レビ人の中のある者たちを、主の箱の前で仕えさせ、イスラエルの神、主を覚えて感謝し、ほめたたえるようにした・・・常に神の契約の箱の前にいた。その日その時、ダビデは初めてアサフとその兄弟たちを用いて、主をほめたたえた。・・・彼は、その場所、すなわち、主の契約の箱の前に、アサフとその兄弟たちをとどめておき、毎日の日課として、常に箱の前で仕えさせた。・・・（ギブオンの高き所にある主の住まいの前には）彼ら（祭司ツァドクたち）とともに、ヘマン、エドトン、その他、はっきりと名の示された者で、選ばれた者たちを置き、主をほめたたえさせた（I歴16：1～42）
- (2) 33年後、ダビデの治世の終わりには（ダビデ70歳）、賛美の奉仕者たちは、人数は多くなり、奏楽の技量も上がり、指揮者には預言の賜物も与えられた。
- ① レビ人、30歳以上、3万8千。4千人は、ダビデが賛美するために作った楽器を手にして、主を賛美する者（I歴23：3～5）
- ② ダビデと將軍たちは、アサフとヘマンとエドトンの子らを奉仕のために取り分け、立琴と十弦の琴とシンバルをもって預言する者とした。・・・王の先見者ヘマン（5節）

- ③ 24の組×12人=288人、主にささげる歌の訓練を受けた彼らの同族、彼らはみな達人であった（I歴25：1～31）
- ④ 【神殿建設へ】神殿の仕様書 御霊によりダビデが示されていた。「主の手による書き物」（I歴28：11～19）
- (3) ダビデが定めた賛美の組織と日課は、ソロモンの神殿に引き継がれた。
- ① 【ソロモンの神殿奉獻のとき】また、歌うたいであるレビ人全員も、すなわち、アサフもヘマンもエドトンも彼らの子らも彼らの兄弟たちも、白亜麻布を身にまとい、シンバル、十弦の琴および立琴を手にして、祭壇の東側に立ち、120人の祭司たちも彼らとともにいて、ラッパを吹き鳴らしていた。ラッパを吹き鳴らす者、歌うたいたちが、まるでひとりでもあるかのように一致して歌声を響かせ、主を賛美し、ほめたたえた。そして、ラッパとシンバルとさまざまな楽器をかなでて声をあげ、「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」と主に向かって賛美した。そのとき、その宮、すなわち主の宮は雲で満ちた。祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった。主の栄光が神の宮に満ちたからである（II歴5：12～14）
- ② イスラエル人はみな、火が下り、主の栄光がこの宮の上に現れたのを見て、ひざをかがめて顔を地面の敷石につけ、伏し拝んで、「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」と主をほめたたえた（II歴7：1～3）
- ③ 祭司たちは、その務めに従って立ち、レビ人も、主の樂を奏する楽器を手にして立っていた。これは、ダビデ王が作ったものであり、ダビデが彼らの奏樂によって賛美したとき、「主の恵みはとこしえまで」と主をほめたたえるための楽器であった。また、祭司たちは、彼らの前でラッパを吹き鳴らしており、全イスラエルは起立していた（II歴7：6）
- ④ 彼はその父ダビデの定めに従い、祭司たちの組わけを定めてその務めにつかせ、レビ人もその任務につかせ、毎日の日課として、祭司たちの前で賛美と奉仕をさせた。・・・神の人ダビデの命令がこうだったからである（II歴8：12～16）
- (4) モーセの幕屋はギブオンから移され神殿に運びこまれた（I列8：4、II歴5：5）
- (5) 賛美の奉仕者は、レビ族の3氏族すべてから立てられた。
- ① レビ族は、ゲルショム、ケハテ、メラリの3氏族
- ② ケハテ氏族は、さらに、アムラム、イツハル、ヘブロン、ウジエルの4支族に。
- ③ アムラムの息子が、アロンとモーセ。アロンの家系のみが祭司。
- ④ イツハルの息子が、コラ。いとこのアロンとモーセに反抗。コラ事件（民16：1～35）→ コラの子たちは死ななかった（民26：11）
- ⑤ 士師・預言者サムエル
- ⑥ サムエルの長男ヨエル（Iサム8：1～3）
- ⑦ ヘマン←ヨエル←サムエル←・・・コラ←イツハル←ケハテ←レビ（I歴6：22～38）
- ⑧ アサフは、ヘマンの右に立って仕えた。ゲルショムの家系（I歴6：39～43）
- ⑨ エタンは、ヘマンの左に立って仕えた。メラリの家系（I歴6：44～47）

3. 賛美の本質 詩篇 33 : 1~3

喜び叫べ、正しき者たちよ、主にあって・直ぐなる者にふさわしきもの、それは賛美。

感謝せよ、主に・立琴をもて、十弦の琴をもて、調べをかなでてたたえよ、彼を。

歌え、彼に、新しき歌を・巧みに弦をかき鳴らして、ラッパの音とともに。

4. 賛美の内容

(1) 詩篇 48 の表題

- ① 歌 a song シール、シーラウ ←動詞シール、シュオル sing 歌う
- ② 賛歌 a psalm ミズ・モウル 楽器で奏でる曲、音階をつけた詩
- ③ ミズ・モウル ← ズウマル =弦を指ではじく、弦楽器を演奏する、音楽を奏でる (ときには、声を伴って)

(2) 詩篇 52 の表題

- ① マスキール サウ・カル 用意周到で注意深い、従って理性的であること
→ よく考える、教える、教訓を与える

(3) 詩篇の内容

- ① 直接的な賛美：神をほめたたえる、神に感謝する、神に求める
- ② 間接的な賛美
 - 教え：神がどのようなみわざを行われたか、神とはどういうお方か、神は何をよしとされるかといった教え
 - 証し：自分が神によって救われたこと、神によって支えられていることの証し
 - 勧め：人々への勧め
 - 警告：不信仰者への警告

5. 賛美と聖霊 エペソ 5 : 18~21

- (1) 御霊に満たされなさい (18 節) →その具体的な命令が次の 4 つ
- (2) 語りなさい、自分たち自身に、詩と賛美と霊の歌をもって。
 - ① 詩と賛美 psalms and hymns 楽曲と賛美歌=詩編のこと
 - ② 霊の歌 songs spiritual 新しい歌 (自分ひとりで自分に語るときには、異言の歌も含まれると考えられる、参考 I コリ 14 : 15)
 - ③ 自分たち自身に (参考、同じ言葉についての訳 ロマ 6 : 11、13、16)
- (3) 歌い、また賛美しなさい、心から、主に向かって。
 - ① 賛美しなさい psalming 楽器を奏でる、ときには声を伴って歌う
- (4) 感謝しなさい、いつも、すべてのことについて、
私たちの主イエス・キリストの御名において、神すなわち天の父に。
- (5) 仕えなさい、互いに、キリスト (写本によっては神) を恐れ尊んで。

6. 賛美と苦難 詩篇 63

- (1) 表題 「ダビデの賛歌。彼がユダの荒野にいたときに」
- (2) 1 節 水のない、砂漠の衰え果てた地で、・・・
- (3) 2 節 こうして聖所で、あなたを仰ぎ見えています。
- (4) 7 節 御翼の陰で、私は喜び歌います。